速報！

ふれあい福祉センター20周年　シンポジウム

～今までのボランティア！　これからのボランティア？～

＊　内山　二郎 さん　　〈ファシリテーター〉

1983年に20年ぶりに長野に帰ってから、ボランティアセンターを拠点に、障がい者支援、アートパラリンピック、地域づくり、傾聴活動、ボランティアセンター運営委員会など、いろいろな活動にかかわってきました。モットーは「一日一生」。

＊　鶴田　多け子 さん　〈パネリスト〉

今、更生保護活動を中心に、大勢の仲間と活動しています（現長野県更生保護女性連盟会長）。社会を明るくする運動。罪を犯してしまった人も、いずれは地域に帰って来ます。誰でも温かく受け入れられる社会づくり、子育て支援、青少年健全育成を目指しています。

＊　太田　耕三 さん　　〈パネリスト〉

「ボランティア」という言葉さえも知らず、31歳から始めた「ひまわり号」（障がいのある人たちと一緒に旅を楽しむ活動）。楽しくて、楽しくて、32年が過ぎました。ここまで支えてくれた多くの皆さんに感謝しながら、これからも歩んでいきたいです。

＊　片山　幸子 さん　　〈パネリスト〉

ボランティアを続けているのは「楽しい」から。80年から点訳活動を始め、96年からは日本語教室を開設し、現在に至ります。毎週火曜日は点訳グループで、水曜日は日本語教室でボランティアセンターにお世話になっています。

＊　小林　博明 さん　　〈コメンテーター〉

長野市ボランティアセンター運営委員。社協職員として、開設当初からボランティアセンターに関わり、長野市のボランティアを知り尽くした男！ 社協を退職後も、様々な場面でボランティアの活躍を支えています。

平成27年３月１日（日）　10：00～11：30　　長野市ふれあい福祉センター
「ボランティアとのつどい」（主催：平成26年度ボランティアのつどい実行委員会）

内山　ふれあい福祉センター20周年という節目のシンポジウムです。本日は長年活動されてきた活動者の皆さんをパネリストにお招きして、皆さんの活動に対する思いや抱負などを伺います。また「なぜ今ボランティアなのか」「地域でのボランティアの役割とは」ということについて会場にもお話を聞きたいと思います。それではまず、皆さんの活動をお聞きします。

片山　点訳ボランティアと日本語教室をしています。日本語教室は17年行っています。

太田　32年前に、障がいのある人と一緒に旅を楽しむ「ひまわり号」を立ち上げ、今まで続けています。

鶴田　更生保護女性会の活動です。年齢は私が一番上だと思いますが、ボランティアは一番若いです。

内山　小林さんは、ボランティアセンター立ち上げから関わり、長野のボランティアの生き字引と言われていますが。

小林　そんなことはないですが、40数年関わっていますね。

内山　ボランティアを始めたきっかけは？

片山　長女が生まれ、姑の面倒も見る中、外との関わりもなく、「こんな毎日は嫌だ！」となりました。そのとき見た新聞記事に点訳ボランティアの講習の案内がありました。文字が好き、本が好き、家でできる。「これだ」と思って始めました。一人前になるには結構かかりました。最初は勉強会。そのあと市報の点訳にも携わっています。

内山　もうひとつが日本語教室。長野オリンピックの頃盛んでしたね。オリンピックが終わって教室が減っていきましたが、片山さんの教室のだけ残りましたね。（会場から拍手）

内山二郎さん

片山　教えて教えられる間で信頼関係が築かれます。なので日本語だけではなく、生活すべての相談にも応じています。愚痴とか、姑さんとの関係とか。

内山　日本語教室だけでなく、生活のすべてを受け留める、ということですね。その上で大事にしていることは？

片山　まずは聞く。どうしたらその人の思いを叶えられるか。自分の持っているネットワークを通じて、その人の一番思う方向に進めるようにしています。

内山　自分では抱えきれないことは、専門家にまかせる、と。やっている中で一番嬉しかったことは？

片山　タイの方で日本の自動車免許を取りたいという人がいました。テキストの振り仮名がなかったのを、みんなで手分けして振ったり。15回目で受かってみんなで喜びました。

片山幸子さん

内山　太田さんはどんなきっかけで？

太田　私は、以前の国鉄、今のJRで働いていました。32年前、ＮＨＫが報道した障がい者の列車の旅の様子を見ました。旅なんて当たり前にできると思っていましたが、旅が実現して喜ぶ障がい者の笑顔に衝撃を受け、自分にできることがしたいと思いひまわり号を立ち上げました。

内山　障がいのある方の旅行は困難？

太田　当時は、エレベータがない、エスカレータがない、駅の改札も車いすが通れない狭さ。そんな時代でした。だから旅行を呼びかけたらすごかった。参加者４５０人、うちボランティアも２００人を超えるくらいでした。

内山　それだけ関心が高かったんですね。

太田　そういうことですね。２回目のボランティアもあっという間に集まった。大変なこともありますが、多くの人の力が集まればなんとかなる。階段は４人で車いすを持ち上げました。重度の障がいの方には列車の中で足を伸ばせるように座席を作ったり。

太田耕三さん

内山　改善の提案をされたとか。

太田　例えば、浅草の浅草寺に行ったときに、地下鉄の改札で車いすが

通れなかったのを伝えたところ、次には早速直っていました。他にもエレベータが設置されたり。旅をするのは特別なことではありません。ひまわり号ではなくても、障がい者の方が普通に旅できるようになるといいです。

内山　交通アクセスの変化はありましたか。

太田　改善されましたが、まだまだ課題は沢山あります。

内山　鶴田さんがボランティアを始めたきっかけは何ですか。

鶴田　52歳の時、卵巣がんを発症し、日赤に135日間入院しました。その時に社会のためにできることをしたいと思いました。友人にボランティアセンターを勧められて来たのが初めてのきっかけです。お年寄り向けのふれあい電話ボランティアや色んな講習会に参加しました。

鶴田多け子さん

内山　あれからもう25年が経ちました。おいくつになられましたか。

鶴田　80歳になりました。

内山　お若いですね。

鶴田　若い人と一緒にいるからですかね。社会のためや人のためにやっていて、楽しくて仕方ありません。

内山　ボランティアをやっていたからこそ体が強くなったんですね。やっていて楽しかったことは何ですか。

鶴田　家族が喜んでくれたことが嬉しいです。

内山　ふれあいセンターができて20年目になりますが、当初はどうでしたか。

小林　当初は、組織はあったが、自発的なボランティア活動はあまりありませんでした。そういったボランティア活動は変わり者と思われていました。

内山　そういう中で、長野市のボランティアセンターの核ができたのですね。活動で大事にしようと思ったことは何でしたか。

小林　障がいをもっている人は普通に生活できない。それを改善しようと思い、自分たちになにができるのかを考えました。以前から活動している人たちと集まり、なぜボランティアをするのかを伝えることを大事にしてきました。

内山　ボランティアセンターの拠点は20年前に決まったのですね。

小林　最初は市役所の四階の片隅の私の机一つが始まりでした。その後いくつかの移転を行い、20年前にこの建物が完成しました。

内山　行政がこの建物の設計図を描いたのですか。

小林　今日の話し合いみたいにみんなで協議しながら、市民にも意見を聞き、この建物が出来上がりました。

内山　ボランティア活動で一番大事だったことは何ですか。

小林　当時は制約が多く使えない施設が多かったが、ここボランティアセンターは登録すればみんなが使えるようにして、すべての人を受け入れられるようにしました。

小林博明さん

内山　みなさんどのような活動をしていらっしゃるのですか。

張　雪かきボランティアをしています。ボランティアセンターに登録して、個人でやっています。

若山　ハッピーサークルに所属しています。大事にしていることは触れ合いです。

白澤　川中島の保健室です。相談にこられた方の話をよく聞いています。

土田　障がい者の方のスポーツ支援をしています。CSネットワーク長野に所属しています。笑顔を大事にしています。

宮澤　コープながのです。一人暮らしの方の生活支援をしています。ここで出来たつながりを大事にしながら、困ったということにはできるだけ耳を傾けています。

内山　ボランティアのコーディネーターの第一号は山田さんですね。

山田　昭和56年頃からボランティア活動を盛んにやっていこうという風潮でした。当時配属された時は、全く人は来ませんでした。当時の活動は人にわからないようにやるのが当時の活動状況でした。本格的にボランティア活動が始まったのがこの時代でした。

内山　長野市にこれだけ多くの活動者が増えてきたのですね。

山田　自分たちがどうにかしたいという気持ちが力になってきたが、大勢になってきたことでエネルギーが希薄になっているのではないですか。

宮崎　絆塾をやっていて、無料学習支援をしています。

土田　古牧で福祉自動車で高齢者の足となる活動をしています。高齢者が一人となってしまわないようにするには、地域ごとにコーディネーターが必要だと思います。

内山　地域ごとに助け合いの仕組みを作って行かなければならないですね。市の福祉計画について、新井さんお話伺えますか？

新井　長野市の地域福祉計画を立てる中で、子どもや高齢者などの問題を縦割りとして捉えるのではなく、それぞれが繋がった問題として考える事が必要だと思います。地域を横に広げる仕組みが必要になっていくと思います。拠点と担い手づくりをコーディネートをしていく役割の人が必要です。

内山　地域の方々が参加していく仕組みをますます進めて行かなければならないんですよね。そこで国はボランティアを人材として捉えて、制度の中で取り入れて行こうという動きがあります。有償ボランティアという物が一つだと思うのですが、有償ボランティアについていかがでしょうか。

伝田　社会をより良くしていこうとするには給与をもらって職業としてやっていく人、一方純粋にお金なんか要らない、純粋に人助けをしたいという人がいます。それをボランティアを呼ぶのかわかりませんが、自由に縛りなく動ける人が必要だと思います。お金が絡むと難しいですね。いづれにせよ目の前の出来事や物事に心が動き体が動く方がたくさん必要だと思います。それはサラリーを求めてやる人じゃなく、心で動ける人がやるべきだと思います。また行政が作るボランティアに巻き込まれないような自発性のあるボランティアを大切にしていきたいです

内山　坂口さんは以前ボランティアセンターのスタッフとして働いていましたが、今は自発的に地域で活動されていますが、お話伺えますか？

坂口　皆神ハウスというものをやっていますが、様々な目的でたちよってほしいです。コンサートなどを行い、みんなが楽しめる空間を作り上げています。地域の事業所も地域の資源として皆さんにとらえてほしいですね。そういうことで地域の人が障害に対して理解することにつながり、自ら動くことにつながります。

内山　地域の事業所として、一番皆さんに身近なボランティアセンターについて期待することなどありますか？

寺澤　人と人とのつなげ役をしてほしいです。やりたいことを実現する場になってほしい。

内山　地域ごとの視点では？

寺澤　地域福祉ワーカーさんはそれぞれ頑張っているが、横のつながりも持って助け合うような仕組みが必要なのではないでしょうか。

内山　ありがとうございました。最後に鶴田さん、一言お願いします。

鶴田　若い人に意志を継いでほしい。私ができることは地域でにこにこ声掛けを、地域とのつながりを大切にしていくことだと思います。それが年寄りの役割。ボラセン受付にいるといろんな出会いがあり、コーディネーターが動き回っているのがわかります。受付で明るく振舞っていると、人とつながりやすくなる。そういうことをやっていきたい。

小林　グリーンハーバー、みどりのもりづくりなどがボランティアセンターで言われています。いろんな人が休んで、集まる場所のような。

鶴田　いろんな事情を抱えた人が立ち直っているから、子どもから年寄りまでのよりどころとして知ってほしいです。誰でも住める地域づくりを目指したい。児童虐待などが非常に増えている。これを一生の課題にしていきたい。

内山　未来に向けて太田さん一言。

太田　先日東京マラソンを完走しました。東京マラソンは1万人のボランティアに支えられていました。ボランティアっておたがえっこだなと思いました。自分自身も続けていきたい。年を取るにつれ自分のやってることが狭くなってきたが、横に広がりを作っていきたいです。今日も３０周年の紙芝居をやりますが、こういう横のつながりを大切にしていきたい。

内山　自分たちの活動に限らず広げていこうということですね。片山さんは？

片山　当事者の取り巻く環境から社会環境の不条理を知りました。アメリカでは障がい者に優しくない店は訴えられたら負けたりする事例があります。そのように主張したら誰もが権利を主張できる社会を目指したいです。しかし、サービスや差別と言う視点で当事者同士ではどうしてもぶつかってしまうことも第三者が後押しできると思います。コミュニケーションの円滑化などをやっていきたいです。

内山　ありがとうございました。ここで会場の方にも何人か聞いてみましょう。

上原　アンサンブル　ヴィヴォーチェという女性コーラスを、大槌地区で歌を通して交流しています。これからも大槌との交流を続けていきたいとおもいます。

渡辺　ＮＰＯ法人アイウィルというところで、ワンコインで学習支援を

行っています。社会システムとして学習救済措置をできるような仕組みを作りたいです。

岸田　昭和１００年の会で昭和の良さを伝えていく活動をしています。カタチに見える不足は助けたいと思えます。しかし、私はこどもに自発的に行うボランティア精神を植え付けて生きたいです。

吉本　ハッピースポット倶楽部で、障がい者支援を行っています。せっかくこのような機会で知り合えたので、みんなで連携していろんなことをしていきたいです。

内山　最後にまとめを小林さんお願いします。

小林　ボランティアとは新しい文化を作ることだと思います。人間でありたいと思う中で新しい文化を作っていく。ボランティアとは今日の話を聞いて３つあると思いました。１に「協働」。多様な人と組織が共同してやっていくことですね。２つ目に、「ボランティアがつなぐ、ボランティアをつなぐ」。ボランティアの役割としてボランティアをつないでいくということです。そのためには学習や研修が必要だと思いますね。３つ目に「嬉しい目標」。感動。夢の実現のために目標を持って。３つの頭文字を表すと〝きぼう〟となります。いかがでしょうか？　希望をもってボランティアをしていきましょう。

（敬称略）

書記協力（伊藤あこ・岩本舜夫・依田知徳）

＊本冊子はシンポジウム当日にまとめた「速報」です。誤字脱字、発言内容の洩れがあるかもしれませんが、どうぞご了承ください。

参加者150人余りが
集まり大盛況！